
運命的な出会い

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命的な出会い

【著者名】

コーリ

N4072E

【あらすじ】

ハヤテの「」とくー連載前の読み切りから派生したエピストーリー。
運命的な出会いをした綾崎ハヤテと花菱美希の、恋物語を描く。

(前書き)

このお話は、『ハヤテの』とくべー』が連載になる前の読み切りを花菱美希バージョンにアレンジした話です。

とはいえ、展開が少しだけちがつと思っています。
楽しんでいただければ幸いですので、どうぞよろしくお願いします。

それでは、本編へどうぞ・・・

- 12月24日 -

世の中が、クリスマスとやらに浮かれている頃・・・
約8ヶタを超える借金を残し、少年、綾崎ハヤテの両親はいなくなつた。

借用書

¥138526630

ハヤテ！！後は頼んだ！！

パパ ママ

綾崎ハヤテ

「（・・・どうぞ・・・どうぞ・・・大体・・・こんな借金頬
まれてもボクには・・・）

放心状態のハヤテ。

そこへ・・・

「おいーーー！」

ザツ！

ハヤテ

「……」

「兄ちゃん……」の家の関係者か？」

ソリに乗ったサンタの代わりに、フローラーに乗ったヤクザが来た。

ハヤテ

「ぬああああああああ……！」

ダツ！

ハヤテは全速力で逃げ出した。

「あつ……」のガキ……待ちやがれ……！」

「チツ……何で逃げ足の速さだ……！」

「おい……車出せ……車……！」

「クソッ……」行きやがった……！」

「探せ……探せ……！」

「各臓器を売つ払つだけだ……サッサと出て来いや『ゴルア……』

ハヤテ

「（う……売られてしまう……）」

16歳のクリスマスイブ……

少年は1人だった。

ハヤテはとある公園まで逃げてきた。

ハヤテ

「ハ〜、お腹が空きましたね〜。かといって電話もないし・・・元より頼れる親戚や友人もいないですしね〜・・・（家がないとはいえ、公園で寝たら凍死するし・・・困ったな〜、このままじゃ餓死か凍死で・・・）」

翌日の朝刊に記事が載るのは確実。

ハヤテ

「・・・イヤイヤ、ポジティブシンキング！！とにかく仕事があれば良いんですよ、仕事が！！そのためになけなしのお金で買った履歴書！！とにかくこれをキチンと書いて・・・何とかバイトを！！バイトを・・・」

その時ハヤテは気づいた。

自分には住所と電話番号がない事を。

ハヤテ

「（住所と電話番号がないと・・・マトモな履歴書にならないなあ・・・）

それではバイトができません。

ハヤテ

「（あの不幸なネロでさえ、死ぬ時にはパトラッショがいたというのに・・・）」

その時、彼にある考えが浮かんだ。

ハヤテ

「（こうなつたら、いつそ金持ちの令嬢とか誘拐してみましょか！？もし失敗しても、刑務所で寝床と食事にはありますし！）」

「

年末にありがちな犯行動機である。

ハヤテ

「（そしてちよびこんな夜の公園の自販機前に、無防備な少女が1人でいますし！）」

ハヤテの目線の先には、自販機前にいる水色の髪の少女がいた。

ハヤテ

「（これは神の、イヤネロの啓示！！パトラッショがボクに・・・悪になれと言つている！）」

そして、ハヤテが飛び出そうとしたその時・・・

「ね～お嬢ちゃん、ヒマ～？せっかくのクリスマスの夜だしね。」

「オレ達とどつか行い？」

2人組が先にナンパ？した。

だが

「ネロの命日に気安くナンパしないで。大体口説き文句が古くさいわ。サツサと家に帰りなさい。」

少女のダメ出しである

「オレ達にそんな口聞いて良いと思つてんのか?」

男の1人が少女に手を上げる

ハヤテはガマンできずに飛び出した。

「女の子に手を上げるなーーー！」

ハヤテの鉄拳炸裂！

八
元

「少女に手を上げるなんて
人としてもこのほかた！！サッサと
家帰れ！！！」

ハヤテが一喝すると、2人は逃げて行つた。

「……………ありがとう……………」

「ヤハテ！」

二
！
！

「何だか知らないけど・・・助かつたわ。」

少女にお礼を言われた。

「助けてもらつたし、お礼がしたいわ。あなたの格好何だか寒そうだから、温かい飲み物でも買つてあげます。」

少女は自販機の方に向いた。

「あ、いけない・・・サイフ忘れて来たんだっけ・・・」

ハヤテは少し考えた後、残り財産120円で飲み物を買い、少女に渡した。

ハヤテ
「はい、あなたにあげますよ。」

「そう？まああなたが買った物だし私は少しだけ飲むけど・・・良かったの？お金使っちゃって。」

ハヤテ

「良いんですよ、もうそれで全財産使い切りましたけど。最後のお金で人助けができたなら本望です。親は借金押しつけていなくなるし、ヤクザには売られそうになるし・・・バイトしたくてもできず、帰る家もない・・・散々な目に遭いましたけど、人生の最後に人助けできて良かつたです。」

「・・・あなた・・・良い子ね・・・」

ハヤテ

「良い子なんですか。さつきまであなたの誘拐を企んでたんです
から。」

「アツハツハツ。そういう事を素直に白状するから……良い子な
のよ……私はもう家に帰るけど……あなたも来なさい。2度も
世話になつたんだし、何かお礼がしたいわ。」

ハヤテ

「はい？（お礼……？クリスマスの夜にお礼つて事は、残り物に
かなりの希望が……）」

ハヤテは少女について行つた。

残飯に希望を持つよつやな男の子で良いんだろうか……？

9

ドオオオオオン……

ハヤテの田の前に、バカデカいお屋敷がそびえ立つていた。

ハヤテ

「あの……もしもしお嬢さん……」……この家は……？

「ん？私の家よ？後、私には一応……『花菱美希』といつ名前が
あります。」

ハヤテ

「……」

花菱

ハヤテ

「この家の娘さんだ……」

花菱美希

「だから、そう言つてゐるじゃないですか。」

ハヤテ

「（知りませんでした……ウワサでいふとは聞いてましたけど……
・大富豪って……本当にいるんだ……）」

そりゃいふでしょ。

ハヤテ

「（ボクは今日の寝床にも困つてゐるところに……）」

美希

「どうしました？早く行きますよ。」

ハヤテと美希は、屋敷に入つた。

ハヤテと美希は、屋敷内を歩いていた。

ハヤテ
「ゾンビとか出でくるあの洋館みたいですね……」

美希

「バイオハザードの話ですか？」

その時・・・

「お嬢様！！」

ダツ！

メイド服を着た女性が現れた。

美希

「あライズナ、ただいま。」

イズナ

「ただいまじゃありませんよ。勝手にパーティ抜け出して、どこに行つてたんですか？」

ハヤテはその姿に少し惹かれた。

ハヤテ

「（花菱さんもキレイだけど・・・この人もキレイだなあ・・・）

」

イズナ

「夜一人で出歩いたら危ないでしょ？」

美希

「タバコ臭い財界のオッサン達の話なんか聞いてられないわよ。」

イズナ

「といひで、ひからの方は？」

ハヤテ

「へー？」

美希

「恩人よ。危ないトコを助けてもらつた。」

イズナ

「まあ それはそれは、美希お嬢様がお世話になりました。私、この家でメイドをさせていただいているイズナと申します。恩人さんなら、何かお礼をしなくてはいけませんね お食事にでもなさいますか？」

ハヤテ

「す、すみません。」

イズナ

「少々お待ちください。すぐにご用意いたしますから・・・でも、美希お嬢様も気をつけてくださいね。」

美希

「え？ な・・・ 何を？」

イズナ

「最近は何かと物騒ですから・・・お嬢様のようなタイプはすぐこさらわれてしまします。」

美希

「勝手に決めつけないでよ。」

イズナ

「さつきもそこでヤクザ風の方々が、『あのガキの臓器は高値で売れる…！絶対に逃がすな…！』と叫んでましたし…」

ハヤテ

「まづ…」

ハヤテはドキッとした。

イズナ

「…・・・どうかなさいました？」

ハヤテ

「い・・・いえ、別に…！（そつだ…・・・こんな事してる場合じやない！早く仕事を見つけて、借金を何とかしなくては…！でも…・・・そのためには住むところを…・・・けど町を彷徨ひなまわいてたら、またあの借金取りのヤクザ達に…・・・ダメだ！考えれば考えるほど…・・・最初から事態が好転していい…！うーん、うーん、困った…・・・）

イズナ

「あの…・・・どうかなさったなんですか？」

美希

「何か、辛い事がいっぱいあつたらしいわ。親に借金を押しつけられて、家も仕事もないそつよ。」

イズナ

「まあ・・・それはそれは・・・」

美希

「でもそれだけ不幸な目に遭いながら、恨み言を少しも言わない・・・良い子なの・・・」

イズナ

「へへ でも・・・仕事ならありますよ 」

イズナは決心したかのように、ハヤテに話しかけた。

ハヤテ
「本当ですか!?」

イズナ

「はい、ちょうど住み込みの男手が足りないと冗談でしたし。」

ハヤテ

「え?あの・・・その仕事といつのはもしかして・・・」

イズナ

「はい この家の・・・執事の仕事ですわ 」

ハヤテ

「(この家の・・・ヒジジ・・・?)」

イズナ

「くだらないボケ方をすると死亡フラグが立つ職業ですが・・・やつていただけますか?」

ハヤテ

「えー？あつ、はい……喜んで……」

美希

「ちょ・・・ちょっとイズナ！？」

イズナ

「良いではないですか 慢性的な人手不足ですし、恩人の方が困つ
ているのですから」

美希

「ま、まあ・・・良いか・・・」

ハヤテ

「やつたあ・・・（ラッキーです！仕事と住む所が同時に見つかる
なんて！…しかも執事って事は家の中だから、ヤクザから逃げ回ら
ずに済む！…それに花菱さんのようなキレイな子と一緒に過ごせる
なんて！春です！クリスマスだけど完全に春ですよーー）」

美希

「・・・」

ハヤテは食事をし、美希はそれを見ている。

ちなみにイズナはいない。

ハヤテ

「そつといえは、ボクの名前をまだ言つてませんでしたね。」

美希

「そうね。」

ハヤテ

「「」の際ですし、名前を明かしましょつか。ボクの名前は・・・」

美希

「綾崎ハヤテ。無軌道な生活を続ける両親の生活費を稼ぐため、各地を転々としながら肉体労働を主とするバイトをこなす。だが12月24日の今日、ついに両親は138526630円の借金返済のためあなたをヤクザに売却し逃亡。その後、あの変なナンパ二人組から私を救つた。」

ハヤテ

「・・・良くそこまで知つてますね。」

美希

「帰る途中に調べたの。『めんなさいね。』

ハヤテ

「いえいえ。それにしてもありがとうございます。雇つていただいくて。」

美希

「恩人には当然の事よ。後、私の事は『美希』つて呼んで・・・」

ハヤテ

「わかりました、美希お嬢様。」

一方、イザはメイドと執事長。

「しかし、イズナよ・・・」

イズナ

「何ですか？執事長のメビウスさん」

メビウス

「恩人で人手不足とはいえ・・・なぜ急にあんな男を？」

イズナ

「本当にお困りのようだつたというのが一番の理由ですが・・・どうも美希お嬢様とあの方が・・・お互いに一時惚れしてらつしやる様子でしたので メイドは何でもお見通し〜」

メビウス

「何〜？」

イズナ

「でもあの兩人は当分気づかないでしょうね。お互い片想いだと思つてゐるでしょ？・・・お互いに両想いである事に気づかず、片想いだと思い続ける美希お嬢様とあの方・・・そんな苦悩の日々を明日から見られると思うと・・・ああ・・・考えただけでゾクゾクしません？」

メビウス

「ああ、ゾクゾクするよ。オマエのその思考回路にな・・・」

翌日

ハヤテ
「おお、これは・・・とても昨夜まで無一文だったとは思えません！」

イズナ

「良かつた、サイズもピッタリですわね。」

美希

「あら、ハヤテ君！執事服を着て来たのね。様になつているわよ」

ハヤテ

「ありがとうございます、美希お嬢様」

美希

「さて、あなたが執事になつたお祝いにパーティをしなきやね。」

ハヤテ

「わざわざありがとうございます。」

美希

「イズナ、メビウス！パーティの準備よ！」

イズナ

「はい、美希お嬢様。」

メビウス

「了解しました。」

ハヤテ達は、準備を始めた。

数時間後、パーティが始まった。

美希は水色のパーティドレスを着ている。

美希

「ど、どうかな、ハヤテ君？私の格好・・・」

ハヤテ

「とても良くお似合いでですよ、美希お嬢様」

美希

「あ、ありがとうございます・・・」

美希はハヤテの笑顔に赤面した。

「あ～、美希ちゃん！」

「何、使用者とラブラブやつてるんだ？」

美希

「！」

2人の少女の声が聞こえると同時に、美希はビクッとなつた。

紫色の髪の少女と黒髪の少女は美希とハヤテの元へと駆けて来る。

少し遅れて、桃色の髪の少女も走つて來た。

「こんにちは～」

「あなたが美希の新しい執事さん?」

「フフフ、初めましてだな。」

ハヤテ

「あ、こんにちは。あの、美希お嬢様。この方達は・・・

美希

「ああ、私の同級生よ。」

瀬川泉

「瀬川泉だよ。」

桂ヒナギク

「私は桂ヒナギクと言います。」

「ミナミハルオで～ぞこま・・・ゲフッ！～！」

泉が二口一口しながら少女をどついた。

朝風理沙

「スマン、朝風理沙だ。」

ハヤテ

「どうも・・・ボクは美希お嬢様の執事をやらせてもらっている綾崎ハヤテです。」

泉

「じゃあハヤテ君だね よろしくね~」

ヒナギク

「美希をしつかり守つてあげてね。この子、何かといつと私に甘えてくるから。」

美希

「わ~!~何言つてるんだヒナ~!~」

ハヤテ

「はい!~美希お嬢様はボクの命に代えてもお守りします。だから安心してくださいね、美希お嬢様~」

美希

「う、うん・・・」

ハヤテの言葉に、美希は顔が赤くなつた。

泉

「(ハヤテ君と美希ちゃん、ラブラブだね~)」

理沙

「(全くだ。あれはいわゆる両想いだな。)」

ヒナギク

「（2人共気づいてないのかしら……）」

泉達は、そんな事を考えながら2人を眺めていた。

美希

「そういうえばハヤテ君って私達と同じ高校生よね？学校はどうなつてるの？」

ハヤテ

「都立の高校に通つてますが、あの両親の事ですからボクはもう学校に来ないとか言つて残りの学費を奪いに行つてるでしょうね……」

美希

「じゃあ、退学になつてるかも知れないの……？」

ハヤテ

「ええ……」

ハヤテは暗い顔になつた。

美希

「（どうしよ……私がこんな事言つからハヤテ君が落ち込んじゃつてる……）」

泉

「じゃあ、ハヤテ君にも私達の学校に通つてもいいつてのはどういつ？」

ハヤテ

「え？ 美希お嬢様達の通つ学校つて・・・？」

美希

「白皇学院よ。」

ハヤテ

「気持ちは嬉しいんですが、ボクには学費を払つ当地が・・・」

ヒナギク

「そんなの、美希の家が負担してあげれば大丈夫じゃない。お金はあるんだから。」

泉

「そだね～、それに学校なり毎日ハヤテ君と美希ちゃんのハハハハシーンが見られるし～」

理沙

「異議なしだな。」

美希

「そ、そ、う、ね・・・ハヤテ君、それで良いかしら？」

ハヤテ

「はい、ボクはかまいませんよ？」

こうしてハヤテは、冬休み明けに編入試験を受け見事合格。

執事の仕事と両立で白皇学院に通う事となつた。

冬休み明けの新学期

ハヤテと美希は、一緒に由里に登校して来た。

ちなみにハヤテの借金はこうと、休みの間に全て美希の親が立て替えてくれたのだ。

美希は返さなくても良いと言つたのだが、それでは納得できないとハヤテが言つたため、ハヤテの給料から少しずつ返済に当たられる事となつたのである。

授業が終わつて昼休みの時間になつた。

ハヤテと美希は、食堂で一緒にお昼を食べている。

ちなみに2人が食べているのは、イズナが作ったお弁当である。

ハヤテ

「おいしいですね、イズナさんのお弁当。」

美希

「でしょ? イズナの作る料理はおいしいのよ。」

ハヤテ

「そりなんですか。ボク、美希お嬢様の手料理も食べてみたいです

ね～。」「

美希

「ほえっ！？そ、そ、う・・・・・機会があつたら、私も作るわ・・・・・

ハヤテ

「楽しみにしますね、美希お嬢様」「

美希

「う、うん・・・・・」

美希は顔が赤くなつた。

ハヤテ

「あ、そつだ美希お嬢様。気分転換がてらに散歩でも行きませんか？」

美希

「良いわよ。良い機会だから白皇の色々な施設を案内してあげるわ。

「

ハヤテ

「お願ひしますね、美希お嬢様」「

ハヤテと美希は昼食を終えると、校庭に向かつて歩き出した。

ハヤテと美希は、白皇学院内を歩いていた。

美希

「「」」が時計塔。屋上に生徒会室があつて、私達はそこで仕事をしていのよ。」

ハヤテ

「じゃあ、美希お嬢様は生徒会役員なんですか？」

美希

「ええ、一応副委員長だけど・・・あまり仕事してなくて・・・」

ハヤテ

「そなんですか。じゃあ、ボクも入りましょうか？」

美希

「うん、お願いするわ。あなたと一緒にがんばれそう。」

美希は赤面した。

ハヤテと美希はまたしばらく歩いた。

美希

「「」」が講堂よ。重要な集会等があると、「」で理事長が発表するの。」

ハヤテ

「白皇の理事長って、どんな人なんですか？」

美希

「一言で言つと、メチャクチャな人よ・・・」

ハヤテ

「メチャクチャな人なんですか・・・」

ハヤテは理事長の姿を思い浮かべた。

美希

「まあ、その理事長もマリアさんにはかなわないのよ。」

ハヤテ

「マリアさん?」

美希

「白皇学院のOBで、三千院ナギちゃんって子の家でメイドさんやつてる人なの。何でもできる完璧超人よ。言つてみればヒナみたいな人ね。」

ハヤテ

「へ?、そうなんです・・・か・・・」

ハヤテはふらつくと、バタリと倒れた。

ドサッ!

美希

「ハ、ハヤテ君!/?しつかりして~つー!」

美希はハヤテに駆け寄った。

ハヤテ

「ん・・・」

ハヤテはしばらくして、目を覚ました。

美希

「あ、ハヤテ君！ 気がついたのね。」

美希がハヤテの顔をのぞき込んでいる。

ハヤテ

「美希お嬢様・・・ボク、気づいたのでしょうか？」

美希

「ハヤテ君、学院案内中に急に倒れちゃったから、先生呼んで保健室に運び込んだのよ。」

ハヤテ

「そうでしたか・・・すいません。」

美希

「謝らないで。リリさん」「仕事続きで疲れてたのに気づけなかつた私も悪いんだから。」

ハヤテ

「ありがとうございます、美希お嬢様。」

美希

「ありがとうございます、美希お嬢様。」

「どういたしまして。あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「何ですか、美希お嬢様?」

美希

「一緒に寝ても良いかな?」

美希は手をモジモジさせながら言った。

ハヤテ

「良いですよ。美希お嬢様のぬくもりを感じられますし。」

美希

「そ、そ、う、じ、や、あ、遠慮なく・・・」

美希はベッドに潜り込んだ。

美希

「ハヤテ君、学院案内はどうだった?」

ハヤテ

「とても良かつたですよ、美希お嬢様。」

美希

「そ、う、良、か、つ、た、・・・」

美希はそつ言いながら、眠った。

ハヤテ

「カワイイですよ、美希お嬢様・・・」

ハヤテも後を追つよつて寝つた。

それからじょじょじょして、ヒナギク達が入つて來た。

ヒナギク

「ハヤテ君、大丈夫ー？つて・・・うわ！」

ハヤテと美希は、仲良くなつて寝ていた。

理沙

「おお、これは・・・」

泉

「見せつけてくれるよね〜」

ヒナギク達は赤面しながら、静かにその場を後にした。

その後ハヤテと美希は1時間後に目を覚まし、仲良くなつて寝ていた。
帰つたのだった。

それから1週間後・・・

美希

「じゃあ、今からヒナの家に遊びに行つて来るね。」

美希はヒナギクの家に向かつ準備をしていた。

ハヤテ

「1人で大丈夫ですか？」

美希

「大丈夫よ、もうすぐ泉達が来てくれるから。」

そう言つてゐると、呼び鈴が鳴つた。

美希

「ホラ、来たわ。」

ハヤテ

「行つてらつしゃい、美希お嬢様。」

美希

「行つて来ます、ハヤテ君。」

美希は外に出ると、泉と理沙と一緒にヒナギクの家に向かつた。

だがこの時、美希を監視する怪しい影があつた事に彼女達は気づいていなかつた。

桂家

泉

「さつて、ヒナちゃんの家にも來たし！」

理沙

「美希を尋問するとするか！」

泉と理沙は一々ややした。

美希

「じ、尋問つて何よ！？」

ヒナギク

「トボケてもムダよ。私達、見ちゃったんだから。ハヤテ君とあなたが仲良く添い寝してるのをね」

美希

「なあつ！！」

美希はあつといつ間に顔が赤くなつた。

美希

「み、見てたの！？」

泉

「うん、バツチリ！」

理沙

「30分経つても起きなかつたから、動画にもしつかり収めさせてもらつたぞ。」

美希

「ええつー！」

ヒナギク

「美希つたら、しつかりハヤテ君に抱きついたものね。よっぽど彼が好きなのね」

美希

「うう・・・」

美希はますます顔が赤くなってしまった。

まさにユーテダ「だ。

ヒナギク

「じゃあ、今から大富豪でもしましょ。最下位だった人が、みんなの分のお菓子等を買って来るつて事で。」

4人は大富豪を始めた。

緊張していたせいか、結果は美希の惨敗。

美希が罰ゲームを受ける事となつた。

美希は文句を言いながら、買い物に出かけた。

美希

「全く、どうして大富豪のプロである私があそこまでボロ負けしちゃいけないのよ・・・」

美希はブツブツ言いながら歩いている。

美希

「それにしても、ハヤテ君と添い寝してルームをビデオに撮られちゃうなんてね・・・」

美希は赤面した。

美希

「恥ずかしいけど、何か嬉しいわ・・・家に帰つたら、ハヤテ君にデートしてつてお願いしよ・・・」

美希は今、とても上機嫌だった。

そのせいだったのだろうか？

彼女は、後ろから近づいて来ている怪しい影に気づかなかった。

そして次の瞬間、美希は背後からハンカチで口を塞がれた。

ガバッ！！

美希

「んぐっ！？」

美希はジタバタともがいた。

美希

「うーっ、うーっ！！」

しかし、やがてハンカチに染み込んだ薬の効果で目がトロンとして

きた。

美希

「つう・・・」

美希は気を失い、地面に倒れ込んだ。

ドサッ！

美希を襲つた影は不敵に笑うと、彼女を抱きかかえた。

そのまま少し歩き止めてあつた車に乗り込むと、何事もなかつたかのように走り出した。

ブオオオオ・・・

ハヤテはリビングで仕事をしていた。

ハヤテ

「フウ、やつと掃除が終わつたよ・・・」

ハヤテは応接間を掃除していた。

ハヤテ

「けつこう広いよな、この屋敷・・・」

そこまで言つた時、扉が開いて泉達3人が入つて來た。

バン！

ハヤテ

「あ、瀬川さん達。どうしたんです？」

泉

「ハ、ハヤテ君大変だよ！！」

理沙

「美希が買い物に行つたきり戻つて来ないんだ！！！」

ハヤテ

「何ですって！？」

ハヤテは驚いた。

イズナ

「お嬢様を捜していたら、これを見つけたそうです。」

イズナはハヤテに何かを渡した。

ハヤテ

「これは・・・ボクが美希お嬢様に買つてあげたカチューシャ！！！」

イズナが渡したのは、ハヤテが美希にプレゼントした緑色のカチューシャだった。

ヒナギク

「たぶん何かあって、その時に落としたんだと想つわ。」

みんなが不安な表情になつたその時、リビングの電話が鳴つた。

ピリリ、ピリリ・・・

ハヤテ

「電話です！」

ハヤテは電話器を取つた。

ハヤテ

「はい、もしもし・・・」

「花菱家か？」

ハヤテ

「はい、そうです。」

「花菱家の娘、花菱美希を預かつた。返して欲しければ、身代金7000万を用意しろ。」

ハヤテ

「わかりました、お金は必ず用意します。その代わり、美希お嬢様の声を聞かせてください。」

「良いだろ？。」

数秒後、美希の声が聞こえてきた。

美希

「ハ、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「美希お嬢様、大丈夫ですか！？」

美希

「う、うん、大丈夫よ・・・手足を縛られてるけど・・・」

「ボウズ、オマエが身代金を持つて来い。」

ハヤテ

「・・・わかりました。ボクが持つて行きます。」

ハヤテの言葉に、ヒナギク達は驚いた。

美希

「ダ、ダメよハヤテ君！・・・来ちゃダメエ！！」

美希は叫んだ。

「「つるせーーー！」」

男は美希の口を手で塞いだ。

美希

「うーつ、うーつー！」

ハヤテ

「美希お嬢様！！」

「30分後にまたかける。良いな、警察には知らせるなよーー。」

そう言つと、男は電話を切つた。

泉

「美希ちゃんーー！」

「つたく、うるさいお嬢ちゃんだ。」

男はそう言つと、ガムテープを美希の口に貼つた。

ペタッ！

美希
「ん~ーー。」

ハヤテ達は、深刻な雰囲気になつていた。

ヒナギク

「犯人からの電話まで、後30分ね。」

泉

「大丈夫？ハヤテ君。」

泉は心配そうに聞いた。

ハヤテ

「大丈夫です、心配しないでください。ボクが必ず美希お嬢様を助け出しますから。」

ハヤテは強い口調でそう言つた。

30分後、犯人から電話がかかつて來た。

ピリリ、ピリリ・・・

ハヤテは電話を取つた。

ハヤテ

「もしもし?」

「ボウズか。金は用意できたか?」

ハヤテ

「はい。できました。」

「よし、今から米花市帝丹中学の体育倉庫に身代金を持って來い。無論、1人でだ。」

ハヤテ

「わかつてます。それより、美希お嬢様は無事ですか?」

「大丈夫だ。今はグッスリ眠つてゐるがね。」

ハヤテ

「そうですか。それでは、今から行きますので。」

ハヤテは電話を切った。

ハヤテ

「では皆さん、今から行つて来ます。」

ヒナギク

「気をつけてね、ハヤテ君。」

イズナ

「お嬢様を、どうか無事に・・・」

ハヤテ

「心配しないでください。必ず美希お嬢様を連れて帰りますから。」

そう言つと、ハヤテは出て行つた。

米花市帝丹中学校 体育倉庫

美希はここ、帝丹中学校の体育倉庫の中に監禁されていた。

美希

「ん~、ん~・・・」

美希は手足と体をロープでグルグル巻きにされている。

さうに口にはガムテープを貼られ、『ん～ん～』としかしゃべる事ができない。

美希

「んつ、んんつ・・・」

美希がもがいていると、扉が開いて例の2人組が入つて来た。

ギイイ・・・

「後はここに来るのを待つだけだな。」

「楽な仕事でしたね、兄貴。」

「ヤツがここに来たら、この嬢ちゃんと一緒に閉じ込めるぞ。」

美希

「んんつ！？」

「ああ、その人の分も身代金をいただくんすね？兄貴頭良いーー！」

美希

「んつ、んん～！！」

美希は必死に叫んだ。

2人組は笑っている。

「まあそういう事だ、嬢ちゃん。残念だつたな。」

兄貴と呼ばれた方が美希の方を向く。

美希

「ん～、ん～！～」

美希は必死にもがいた。

「つるさい嬢ちゃんですね、兄貴。」

「そうだな。少し眠らせておくか。」

二ツト帽の男はそう言つと、スタンガンを取り出し美希に近づいて
来た。

コツ、コツ・・・

美希

「んつ、んんつ・・・」

美希はガタガタと震える。

彼女の脳裏に、ハヤテの姿が映つた。

次の瞬間、美希は力一杯叫んだ。

美希

「んんんん～つ！～！（ハヤテ君～つ～！～）」

その時だつた。

ハヤテの声が聞こえて来たのは。

ハヤテ

「美希お嬢様」！！」

美希

「（ハヤテ君だわ・・・）」

2人組は扉の力ギを開ける。

力チャ！

ハヤテが中に入つて来た。

ハヤテ

「美希お嬢様！！」

美希

「んんっ！（ハヤテ君！）」

「の」のこやつて来やがつたな。悪いが、オマエを帰すワケにはイ
カン。」

「オマエにも人質になつてもらひ。行け、弟！」

弟と呼ばれたグラサンの男は、ハヤテに突っ込んで来た。

だがハヤテはそれを軽くあしらつと、グラサンの男を床に倒した。

ドツー！

「なつ・・・」

二ツの男が狼狽^{うるた}えていると、ハヤテが目の前に現れた。

スツ！

「ヒツ・・・」

ハヤテは二ツの男の腹に鉄拳をブチ込んだ。

ドゴツ！

「ガハツ・・・」

男は床に倒れる。

ハヤテ

「美希お嬢様！大丈夫ですか！？」

ハヤテは美希に駆け寄ると、口のガムテープをはがした。

ピリ・・・

美希

「イタタ・・・うん、大丈夫よハヤテ君・・・」

美希はうなずく。

ハヤテ

「今、ほどいてあげますから・・・」

ハヤテはそう言つと、美希の縄をほどいた。

ハヤテと美希は、花菱邸へと帰つて來た。

もちろん、手をつないだ状態で。

2人は玄関の扉を開けた。

ガチャ！

玄関では、泉やヒナギク達が立つていた。

泉

「美希ちゃん、無事だつたんだね～！！」

ヒナギク

「無事で良かつたわ。」

理沙

「お～お～、見せつけてくれるじゃないか2人共」

理沙の言葉に、美希は赤面した。

イズナ

「お嬢様、良い機会ですから彼に告白なさいな。」

イズナは微笑んで言った。

ハヤテ

「え、告白って……ボクにですか？」

イズナ

「そうですよハヤテ君 さ、お嬢様早く。」

イズナが美希の背中を押すと、美希はモジモジしながらハヤテに近寄つた。

美希

「ハヤテ君、私は……あなたの事が好きです。」

美希はハヤテに告白した。

ハヤテはしばらく沈黙した後、静かに美希を抱きしめた。

ギュッ！

美希

「キヤツー！」

ハヤテ

「ありがとうございます、美希お嬢様……ボクもあなたの事が好きですよ」

ハヤテはそう言つと、美希の口にキスをした。

美希

「これからもよろしくね、ハヤテ・・・」

ハヤテ

「これからよろしく、美希・・・」

ハヤテと美希は、再びお互いにキスをし合つ。

そんな2人を、イズナ達は微笑みながら見つめていた。

2年後、ハヤテと美希はめでたく結婚した。

イズナ達に祝福されて。

クリスマスのあの日、運命的な出会いをした2人。

2人はこれからも、幸せな未来を築いていく事だらう・・・

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4072e/>

運命的な出会い

2010年10月9日07時13分発行